

人口問題研究所

研究資料第九五号

昭和二十九年三月一日

戦後農村人口移動の地域的性格に関する一考察

厚生省・人口問題研究所

昭和二六年九月岡山県下の邑久郡吾久村および後月郡青野村について行った農村人口収容力調査の結果については、すでに本研究資料中八〇号「出生率高低の社会的要因に関する一考察」その他の資料として報告済であるが、本報告は特に調査結果に基き詳しく人口移動の実態を検討したものを報告におむる農村人口移動の地域的性格を處うに足る一資料としてこゝに採録することとした。前報告とおなじく林茂技官の担当及び執筆による。

昭和二九年三月十日

人口移動は空間的地理的移動であるが、本来的には距離を求めての移動である。たゞこの場合、距離は後者における距離の制約としてはたゞくことは否定し得ないであらう。

他の条件にして等しとすれば「人は余り遠くをゆかず」というラヴエンスタインの命題は当然妥当とするところである。

周知のように彼は移動における距離的制約を強調して

- 一 移動者の大部分は近距離をゆくにすぎない。
- 二 農村から都市への移動者の数は移動距離と逆比例するといふ。

三 遠距離移動者は、商工業の大中心地の一を遷移し移動するのが一般であり

四 町に生れし者は農村地方に生れし者よりも移動者が少ない

五 男性に多い遠距離移動を除けば、女性の方が男性に比し移動は多いと、その移動論を要約している。

右はラヴエンスタインが一九二九年、イギリス、アイルランド、歐洲大陸およびアメリカ海に出ける人口移動の實証的研究の結果に基くものであるが、わが國においても野尻敬授によつて今次大戦前、約一〇ヶ年間の農民農村の華興に基いて、人口移動の實証的研究が行われ、外たがたラヴエンスタインの上記の命題の妥当性が検討されている。

その概要は

一、近距離移動は遠距離移動に比し優勢をいめる。

二、近距離移動は女子に多し。

三、下層階級は距離をゆく（とくに女子）。

四、上層階級は距離をゆく（とくに男子）。

特に要約され、一定の拡張的解釈を条件として、上記ラウエンスタインの命題の妥当性を承認しておられる。

移動における距離の遠近はもとより相対的の概念で、これにたいする一定の距離的規定を以てするとは困難である。男女移動の距離的性格についても条件に相対的の概念によつて検討される他は、いかに実証的に論究された上述の如き移動における距離的制約あるいわその地賦的性格がわれわれの調査結果において如何に現れているかを、検証実施した農村人口収容力調査について論究してみようと思はるのであるが、いまはまず集計の終つた二ヶ村について分析を試みよう。

## 二、移動の命令段階程度および状態

この小文の課題とするところは右の如くであるが、本来農村人口の移動の主流をなすものは取業的地域的移動であり、社会的取業的地位の転換を求めて行われる盛岡的地理的な動きである。したがつて、それは農村に収容されつゝ、あつた人口、それ故に農村経済を構成しつゝ、あつた労働人口でもあるが、それらの人々何らかの理由に基いて、取業的地域的な移動転換を行つて現象である。

だから、それは特定の条件のもとに発生する正々社会的現象であり、農村農村の間の事情のみならず

ず、とくに都市的産業の情勢如何によつて強く左右される性質を帯びるものである。

われわれが農村人口の移動現象を觀察した時、終戦以降の数年であり、その移動も当然に都市産業の増減と復興との事情を反映し、戦前における移動躍進期に比し、むしろ移動波瀾の時期にあたるといふべきである。

したがつて、移動の地域性を同調化するに先だつて、移動のその他の性格とくに取算的移動の性格如何を觀察しておく必要がある。

調査として選定された村は、とくに出生率の高低相反する三ヶ村のいずれも岡山県下である。

この三ヶ村の人口移動現象の一端については、別稿の農家出生率の高感と社会経済的動向に報告してあるから、こゝでは出来るだけ重複を避け要約するにしよう。

### 一、出生率と移動

高出生率村たる青野村(岡山県後月郡)と、低出生率村たる蓮久村(岡山県蓮久郡)の農家の家族員数、それと出生率、七人および五、五人でわずかの出入の差がある程度である。このことは出生率の高い青野村において、往來相違人口移動が促進されたことを示すが、低出生率の蓮久村において人口移動はきつねでなかつたことを物語るといえる。

「出生率を相する農家」の出生率と出生率の差で一年以上の古村を以てしては、往來相違人口移動は、青野村において全戸の三四%であるが、蓮久村においては一七%にすぎない。

出生率総数(昭和三〇年八月以降、調査時現在)は、青野村三〇〇人であるが蓮久村は二一九人である。一方、往來相違人口移動の七人であるに比し、蓮久村においては、五人にあたる。

だから人口移動は、高い出生率の安全網の作用をしているわけ、青野村農家の高出生率が、農家

余剰人口の排出と、他面における低い生活污水率によつて維持されてきたことを示している。

しかし、最近青野村の出生率も低下傾向を示してきたのは、戦後における人口排水の困難化による圧力が、生活低下の拒否によつて内攻し、人口そのもの、出生低下として現われんとしつゝあるものとみうるであらう。

出生死亡率ともに低位で自然増加もごく低くかつ安定化の傾向を示す遷久村においては、人口の移動もどれ程ではない。

### 三、移動率と教育程度

農区移動の年令は、青年期に最も集中していることはすでに一般に知られている。それは青年期における生産的な旺盛な活動力と、産業機能的な適応性とが都市労働力として最も好適な条件を示すからである。そして、農家余剰労働力の賃労働化を求めた移動が、移動主流である以上、移動者の年令が、労務市場における最大条件の一つとしての年令によつて規制選択せられ、青年期に最大を限すのは当然である。

いま、上記岡山県下ニヶ村における移動者の移動率についてみれば、青野村においては男子移動者については、一五〇二九人の青年層が六七%を占め、女子についても全じ軍令層が八〇%を占め、男女とも移動者の殆んど近似的割合はこの青年前後層によつて占められている。男子においては、一五九六人の出生死亡率の移動は一九%みられるが、女子においては全じ軍令層の移動はわずか九%あるのみである。

遷久村についても、青年層の移動という傾向は全じように顕われている。

しかし、一四六米満の幼少者および六〇才以上の老令層の移動は、男女を置いて極く少ないことは

青野邑又両村ともに全様である。

入村者の年令についてみれば、両村とも男女一五〇二九才の青年層の比率が高いことはみられるが、圧倒的部分がどこに集中しているのかは、一四才未満の幼少者（青野村一八・七％、邑久村三九・〇％）および三〇〇五九才の壮年層（青野村二六・六％、邑久村二六・三％）の入村者もかなりみられる。これらにおいて前記移動（両村）の場合とや、異なるといえる。（すなわち両村の場合における一四才未満の比率は青野村八・七％、邑久村八・八％、三〇〇五九才の比率は青野村一三・三％、邑久村一〇・五％であった。）

両村者と入村者を年令別に比較してみれば、一五〇二九才の青年層のしめる比率は、両村者の方にやや大であるが、村別には邑久村の方がこの年令層を送り出している比率はわづかばかり高いようである。

そして、こくわづかではあるが、両村とも老幼者をより多く流入せしめている傾向がみられる。すなわち半令橋皮上における農村人口の特徴は原則的には貫かれているといえる。

否は、戦後農村人口の移動滞滞期にみられる移動者の年令的性格を示す一例であるが、それが一般的傾向を示すものであるかについては、いままで十分な論究を要するが、これを戦前の農村人口の移動年令の傾向に比して若干の特色がみられぬこともない。

すなわち、戦前移動促進期における移動年令については、たゞ青野苑教授によれば、一男子において一五才一五才一八九才の青年前期移動が最高を認め、その前後の五才別移動を大ならしめるが、三五〇二九才の移動からは急に減少する。女子は男子より一層若い十四才未満の少年期移動を最大とし、一四才前期移動も多いが二〇才一四才移動から急に著減し、早期終了を示している。三、なお村類型別および農家階層別には、より貧窮村ほど、又より下層農家ほど、より一層若い一四才未満の少年期移

動が促進せられていることが示されていた。

かような傾向と対比しうるためには一層広汎な資料集計にまたねばならぬが、詳細は今後に待つとして、現在の結果をもつてすれば、戦後移動滞滞期における移動者の軍令的性格は、移動の困難性を反映して、戦前移動促進期にみられたような一四次未満の少年期移動の低い比率は全く影をひかえていない。反面青年後期以後の移動の比率がや、高いように思われる。

移動は村類型の如何を問わず、又農民階層の上下の区別なく全体的事実として觀察しうるところであるが、移動者の教育程度も無修学から大学卒業にいたるまでみとめうるところである。たゞ農民のおかれたる経済的地位の如何によつて教育程度の異つてゐることはいうまでもない。

青野村においては、農村者の教育程度は小学卒業が最多(四六・三%)をしめ、中学卒業がこれに次いで多い(四一・六%)。両者によつて殆んど大部分がしめられ、専門学校以上はごく少い(四・二%)。入村者も同じように小学卒業が首位(五六・九%)をしめ、ついで中学卒業が(三二・一%)で、専門学校以上卒業はわずか三・三%にすぎない。

しかるに邑久村における農村者の教育程度をみるに、最も多いのは中学卒業であり、五〇・九%。小学卒業は二九・八%である。この中小学卒業が首位をしめる青野村と異なり、更に専門学校以上卒業が一〇・五%みられること、共にこの村の教育程度の高さがしられる。入村者についても同じ傾向で最多をしめるのは中学卒業(三四・三%)であり、小学卒業がや、低下して三三・六%、そして専門学校以上卒業も八九%みられる。

戦前移動促進期における農村者の教育程度は、尋常小学卒業と高等小学卒業をもつて殆んど圧倒的部分がしめられ、中学以上大学教育に及ぶ者は中選者を加えても全体の割にすぎない状態であった。学生改革が行われ、教育程度の比較は厳密には困難であるが、邑久村の如く近代色豊かな農村において



中野市が首屈をしめ、神門海校と大塚市のみで約一〇％をしめている実情は、移動者の教育程度  
の向上を窺う一端としてもめづかる反響であるまい。

とくに戦後移動の階層的分布において、中上層に移動促進がみられること、前市場における  
環境が良質ゆゑに向つてゐることを示すものと考えられるが、是より定ても、広い意味での移動者の教育  
程度の向上、努力の質的向上が考えられよう。

### 三 移動と職業

他市若しくは県内などのような職業について、他市を中心にみればそれほどのような職業に分散  
していつたがをみるわけであるが、努力市場を中心とすれば、如何なる努力市場が、農村からの移動  
者を吸収しつゝ、あるかを示すものである。

一、他市した男界の中現存はお職業に従事してゐるものは前市とも見られ、その比率において前市を  
しめてゐる。青野村二五〇、池久村三三、四〇で、前者の方がや、大である。すなわち職業を出て農  
に農家に入り職業努力に従事するもの、比率は青野村の方が大である。

二、次に頭腦的知識的職業としての公務員になつたものか二位をしめ、池久村一六、三三に対し、青  
野村一四、三〇の方がや、低い。とくに池久村ではその約七〇％は教員で、教育程度の高い村の性格  
を反映してゐるが、青野村では地方官公職の従事者勤人がみられる。

三、ついで私企業上の勤人であるが、いづれも商店会社に就職したもので、その比率は池久村一四、三〇  
青野村はや、高く三三、六〇である。

四、小売業者となつてゐる者は前市ともわづかづ、みられる。池久村八、三三、青野村六、〇である。  
五、なお、池久村には自由業者（医師、獣医）がみられるが青野村にはこの種の職のものはない、反対に

青野村には日傭労働者があつたが、蓮久村にはこれ成るられぬ。

次に女子について見れば、

一、男子全数を出して全くと農家に従事しているものか蓮久村三五七名、青野村四五五名で割合を測っているが、その比率はやはり青野村の方が高い。

二、他は非農に比率が低くなるが、公務員、私営警備隊等務的職階に従事する者の比率はわづかから蓮久村の方が高いといえるが、職階使用人、補綴婦等とほつとすると青野村にのみみられる。

三、なお、他出して現在取扱はる者も両村とも相違みられるが、青野村においては無職者中絶取扱者は一七名そのうち生産軍令にあるもの七名であるが、蓮久村においては、無職取扱は八名でありその中生産軍令にあるものは五名である。

以上にみられる如く、蓮久村の移動主流とされて来た(一)工業(職工)(二)商業(商賣)、(三)公務(勤人)自営業中、前村とも前二者は著るしく不感で、わづか勤人及び公務私営業に移動していることが認められるが、農業への移動が著しいことが特徴的である。

女子にあつても、従来(一)工業(女工)(二)職階使用人(女中)(三)商業公務自由業(女店員、娯楽員)が農業移動の主流であつたが、両村とも工業への移動はみられず、蓮久の女子労働者使用人等に前日のおもかげを致しているにすぎない。反之農業への移動は男子同様割合を占めている。

以上の傾向は、戦前移動促進期に現れたわづか農業労働力移動の漸進的傾向の正副的支配と、農業労働力としての吸収の極めて特徴であつたのと表裏に逆の傾向を呈すものである。

これは農業余剰労働力の移動がその質的変化を主流とするものであり、資本削減労働力の消費によつて左右されるものである以上、戦後資本削減途上の労働需要の萎縮傾向によるものといえる。その反動農業への移動が最高をしめることは、その大部分が職階によるものであるにせよ、農業労働力の

農村内之の滞留層階を意味し、余体として原來的小農制への膠着と、その一層の零細化とを派すものに他ならぬ。

しかし又、かような移動滞留の中に承された兩村の移動の性格の一端は遷久齊野兩村の性格を反映して、より遷久村の移動は遷久齊野兩村の中でも積極的知識的販賣移動の傾向をとることがみられ、齊野村ではむしろ、低賃な原來的階級的労働の移動に傾いていくということが出来よう。

### 三、戦後農村人口移動の地域的性格

戦後の移動滞留期における販賣移動の特色を、上記三ヶ村の調査結果によつて観察したところ以ての如くであり、簡上層の不服を反映して、どこへの移動の、ごく少数であること、その反面、農業への吸収をその特色として示している。

しとがつて、移動における地域的性格も当然にか、その事實を反映していると言へる。

まず調査村の地域的性格ともいうべきものを観察すれば、遷久村、齊野村ともに、河内における大労働市場たる原成神地帯より比較的遠隔の地帯にあり、むしろ前述の大都市としては岡山が数へられる。

したがつて、このような意味においては、三ヶ村とも國民經濟内における中核的大労働市場より比較的遠く離れた地帯にある農村と考えてよいのである。かゝる大労働市場との移動交流を中心にして考へると、さういふような労働市場に積極的遷移する農村における人口移動と対比せしめ考へるのが便利であるが、いさか、その資料を有しないから、この異質一層不同に於けること、する。

まづ岡山県遷久郡遷久村について移動者の地域的性格を検討しよう。

地域を、村内、隣町村、郡内其他および隣郡、県内その他市郡、県外および外地と分けてみるならば、  
県外（二七・七％）が第一、隣郡（二六・八％）が第二位、県内其他市郡（一八・三％）が第三位、隣町村  
および村内はそれそれ（一〇・六五％）で最下位にある。（オ―表参照）

一応県外をもつて遠距離移動とするならば、かゝる意味において遠距離移動が比較的多いといえる。  
県外移動の比率を階層別にみれば、上下の両層および非農家において、比較的どの比率が高く、中層  
において低い傾向がみられる。

隣郡への移動を階層別に見れば、中上層においてその比率は比較的高く、下層に低い傾向がみられる  
そして、最下層および非農家には隣郡への移動はみられない。

県内其他市郡への移動を階層的にみれば、下層と非農家にその比率は高いようである。  
隣町村への移動を階層別にみれば上下両層および非農家には全然みられず、主として中層によつてし  
められている。

村内移動についてみれば、最下層および非農家にはみられず、まづ主として中層農家の移動であるとい  
える。

第一表

百久村、他出者の地域別行先

	村内移動	隣町村	隣郡	県内其他郡市	県外	外地	本府	計
総数	(10,95)	(10,95)	(26,9)	(19,3)	(377)		(4,2)	(1000)
〇三所未済								
〇五〇、五	(19,1)	(9,5)	(9,5)	(33,8)	(38,1)			(1000)
〇五〇、〇	(10,3)	(14,5)	(33,7)	(33,4)	(16,3)			(1000)
一〇、一、五	(33,0)	(17,4)	(43,5)	(4,3)	(17,4)			(1000)
一五〇、〇	(9,1)		(36,3)	(18,2)	(36,5)			(1000)
非農家				(28,6)	(43,8)		(38,6)	(1000)

なお男女別に分けてその行先をみると、男子は県外(40.6%)が第一、県内その他の郡(34.3%)が第二、隣郡(13.5%)で最下位である。

これに対し女子は、隣郡(34.8%)が第一位、県外(26.1%)が第二位、県内その他の郡(28.1%)が第三位、隣町村(11.6%)の順となっている。(第一表参照)

すなわち男子は県外が第一であるが女子は隣郡が第一で、男子の方が女子より遠距離をゆくといえる。

向はみられる

として県外へゆく男子は階層的にみれば上下の階層に多く、隣郡へゆく女子は最下層および非農家に  
はみられず中上層でしめられている。隣郡へゆく男子も中上層に比較的比率高く、最上下両層および非  
農家にはみられない。

女子で県外へゆくものは下層および非農家に比率の高いことがしられる。

男子は隣町村にゆくのは中上層に比率が高く最上下両層および非農家にはみられない。

第二表 邑久村隣村者男女別行先 (村内移動を除く)

階層別	隣町村		隣郡		県内其他郡市		県外		外地		不明		計		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
総数	五	八	八	二四	九	一四	一	一五	一八			五	二七	二九	一〇六
〇、三町未満															八
〇、三〜〇、五	一	一	二		一	四	一	五	三			九	一	八	一七
〇、五〜一、〇	三	四	四	一三	四	七	二	六				二	一三	一五	四四
一、〇〜一、五	一	三	二	八	一		一	三				一	五	六	二〇
一、五〜二、〇			四		一		四					五		五	一〇
非農家					一	一		三			二	一	一	六	七

更に之を距離関係を隔れて、村町、小中、大都市および六大都市という如く都鄙別移動地域に分け移動比重を検討してみると、村への移動（四四・五％）が過半数に近く首位を占めているが、ついで大大都市（三〇・一％）が第二位であり、第三位は大都市（一五・一％）四位以下は、町（一〇・一％）、中都市（三・三％）、小都市（〇・六％）の順となつてゐる。（付三表参照）

これを男女別にみれば村への移動者は女子の比率が高く（四七・四％）、階層別には中上層に高い。村へ移動した男子の比率は女子より低く（三九・五％）階層的には中層に高いといえる。

村について移動者の多い六大都市についてみれば、男子の比動比率の方が高く（二五・六％）、階層別には上下両層に比率が高い。

男子に比すれば六大都市への女子の移動比率は低い（一七・一％）が、階層別には下層に高い。として非農家の比率もかなり高いことが知られる。

六大都市について多い大都市についてみれば、比率としてはや、男子に高いが、その他それ程の差異はみられない。

中都市および小都市への移動は非常に少いようである。男女とも中都市への移動は下層にみられ、小都市への移動は女子の中層に一例あるのみである。（付四表参照）

第三表 遷久村都鄙別農村入質

階層別	村	町	小都市	中都市	大都市	六大都市	外地	不明	計
総数	(四四五)	五三三	(一一〇)	九二一	一、一八〇	(三三〇)	(三三〇)	(三三〇)	一、一九
〇・五未満	(二二五)	一〇七	一	(三五)	一	(三五)	一	(三五)	八
〇・三〜〇・五	(三三三)	七	一	(三五)	一	(三五)	一	(三五)	三





以上を簡単に要約すれば、田久村における移動は、全体としてみれば県外が断位を占めていて男女別には男子が県外に多く出ている。女子は隣郡が第一である。女子より男子が遠距離をゆくという一般の傾向をみとめられるようである。

階層別には注目すべき傾向としては上下の階層がほぼ非農家が、県外に遠く出ていくという点である。これは移動促進期に下層農家は余り遠くへゆかぬといわれたこと、や、異なる傾向であり、むしろ、大町・市街から遠くへ出ていくにつれて、移動傾向が分散的となり、下層も遠距離移動を行う傾向が定まるといわれる。これは、近い傾向を呈しているといえる。

次に中層農家は考えられる農家は、余り遠くをゆかず、主として隣町村へ移動し又は村内移動を行つていくことである。

都鄙別行動については、村が通事級におよぶ程多く、ついで大々都市、および大都市であり、他は非常に比率が低下していることである。

かような傾向は、前節でわれわれのみた移動者の現在の職業に就かれた傾向すなわち職業を第一とし、ついで公務員私業等の購買者などの階層に照応するであろう。

次に岡山県松野郡高野村について移動者の地理的性格をみる。

地域を前掲の如く、村内、隣町村、郡内での北および隣郡、県内での他市郡、県外および外北に分けてみるならば、高野村に於いても県外へ三七・五%が第一、隣郡へ二六・〇%が第二位であるか、外北は隣町村（一八・〇%）、市街位村内移動（一六・〇%）で隣距離がや、順位を降し、県内其他市郡（二二・五%）が第三位と見なしている（中五表参照）

すなわち、こゝでも県外への移動が最優勢であることにおいて要りはない。

その県外移動の比率を階層別に見れば、上下の両層および、非農家において比較的その比率が高くなる

層において低い傾向がみられる。

隣郡への移動を階層別にみれば中上層においてその比率は高く、下層にはごく低く、非農家にはみられない。

隣町村への移動を階層別にみれば、上下両層に比べて、中層に比べて中層によつてみられている。このように階層別移動の傾向は越久村の場合にも大體同じようにみられたところである。

村内移動の比率としては、上下両層に高く、中層に比較的低いようである。この傾向は越久村の場合と異なる傾向を示しているが、非農家については全然みられないといふことである。

県内其他市郡への移動は下層においてその比率は高いようであるが、非農家にはみられない。

第五表 青野村世帯者の地域別行先

	村内移動	隣町村	隣郡	県内其他市郡	県外	外地	不明	計
総数	(1,600) 622	(2,800) 516	(1,030) 404	(1,350) 515	(630) 515	(400) 8	(400) 8	(10,000) 3,000
世帯主	(38,6) 6	(41,8) 1	(44,8) 1	(9,5) 2	(47,6) 10	(4,7) 1	(4,7) 1	(10,000) 3
世帯主の親	(1,3,3) 3		(6,7) 1	(3,6,7) 4	(5,3,3) 8			(10,000) 15
世帯主の兄弟	(1,3,5) 11	(3,4,0) 35	(3,5,0) 36	(3,5,4) 16	(1,7,3) 8			(10,000) 14
世帯主の子	(2,3,1) 6	(2,9,6) 9	(1,0,1) 14	(3,3,3) 1	(3,4,4) 14	(4,1,1) 2		(10,000) 16
世帯主の親戚	(1,3,5) 11	(1,8,5) 1	(1,3,7) 3	(1,6,7) 2	(1,3,3) 2			(10,000) 10
非農家	(1,3,5) 11	(1,8,5) 1	(1,3,7) 3	(1,6,7) 2	(1,3,3) 2			(10,000) 10

なお男女別に分けて隣村者の行先をみれば、男子は県外（四三・一％）が才一、県内其他市郡（一五・四％）が才二位、隣町村（一五・三％）が才三位、隣郡（一三・九％）が才四位となっている。これに対し女子は隣郡（三五・四％）が才一位、隣町村（二六・六％）が才二位、県外（二五・〇％）が才三位、県内其他市郡（一・一五％）が才四位となっている。（才大表参照）

すなわち、青野村においても、男子は県外が才一位で遠距離移動の特色をみせているが、女子は隣郡が才一、隣町村が才二で比較的近距离移動の性格をみせている。そして県外へゆく男子は階層別にみれば、上下の階層に比率が高く、隣郡へゆく女子は中上層に比率が高い。

隣町村へゆく女子は全層中上層に比率が高く、下層および非農家にはみられない。しかし、県外へゆく女子は下層に比較的比率の高いことがみられるのである。

才大表 青野村男女別隣村先

階層別	隣町村		隣郡		県内其他市郡		県外		外地		不明		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
総数	(五三) 一一	(六〇) 三五	(三九) 一〇	(五四) 三四	(二四) 一四	(二五) 一一	(三三) 三一	(五〇) 二四	(八一) 六	(三二) 二	(〇〇) 七	(〇〇) 九	(〇〇) 九	(〇〇) 六
三町未満	(一七) 一	(一七) 一	(一一) 一	(一一) 一	(二二) 二	(二二) 二	(六六) 四	(六七) 六	(六七) 一	(六七) 一	(二〇〇) 六	(二〇〇) 九	(二〇〇) 九	(二〇〇) 六
〇、三、〇、五	一	一	一	一	一	一	三	三	一	一	七	六	一	一
〇、五、一、〇	(五〇) 八	(三三) 一七	(二四) 六	(九三) 二〇	(三〇) 一	(八八) 四	(三三) 九	(五〇) 九	(二〇) 四	(三三) 一	(〇〇) 七	(〇〇) 九	(〇〇) 五	(〇〇) 一
計	一一	三五	一〇	三四	一四	一一	三一	二四	六	二	七	九	九	六

10515	(三五)	(三九三)	(六七五)	(四五)	(四三)	(六五)	(六六)	(大)	(四三)	(一〇〇〇)	(一〇〇〇)	四〇
15030	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	(一〇〇)	八
非農家	1	1	1	1	1	(一〇〇)	(一〇〇)	1	1	(一〇〇)	(一〇〇)	三

更に以上について距離関係を离れて 村、町、小中大都市および大大都市という如く都鄙別移動地域に分けて移動比重を検討してみよう。

すなわち村への移動(三七〇%)が第一位をしめ、ついで町(二三五%)が第二位、第三位は大大都市(一一二〇%)で、第四位以下は大都市(九五%)、中都市(四五%)、小都市(三五%)の順となっている。(ハセ表参照)

これを男女別にみれば村への移動者は男子の比率が高く(三九六%)、階層別には中層と下層に高い。村へ移動した女子の比率は二、では男子より低く(三四三%)階層別には上層に高いようである。

村について移動者の多いのは二、では町であるが、女子の移動比率の方が高く(三三三%)階層別には中層に高い。男子の町への移動者の比率は低く(一四九%)、男女ともに下層農家と非農家の比率はごくわずかが特徴である。

大大都市への移動についてみれば男子の比率がや、高く(一一三九%)階層別には上層に高い。女子の大大都市への移動比率はや、低い(一一一%)が、階層別には上層にや、高いといえるであろうが、下層にも移動者はみられる。

ついで大都市への移動者は女の方に高く(一一三%)階層別には明らか下層に高い傾向が見られる。

男子の大都市への移動比率は、はるかに低い（六、六％）が、階層的には下層に高いようである。  
 中都市および小都市への移動は、でもごく少数である。階層別には、男女とも中都市への移動  
 は中層にみられ、小都市への移動は下層にみられるようである。（オハ表参照）

表七 青野村郡別農村人質

階層別	村	町	小都市	中都市	大都市	大大都市	外地不明	計
総数	(三七〇) 七四	(三三五) 四七	(三、五) 七	(四、五) 九	(九、五) 一八	(一、〇) 三四	(一〇) 三〇	(一〇〇〇) 三〇〇
〇三階未満	(四、九) 九	(四、八) 一	(九、五) 二		(三、三) 八	(九、五) 二	(九、六) 五	(一〇〇〇) 一三
〇三〇〇五	(二、七) 四		(一、三) 三		(四、七) 七	(六、六) 一	(六、六) 一	(一〇〇〇) 一五
〇五〇一〇	(三、七) 三九	(二、九) 三一	(一、九) 二	(七、七) 八	(四、八) 五	(五、八) 六	(三、五) 三	(一〇〇〇) 四〇
一〇〇一五	(三、六) 一五	(三、八) 一三		(三、三) 一	(四、五) 二	(三、三) 一	(二、七) 三	(一〇〇〇) 四六
一五〇二〇	(五、八) 七	(二、六) 二				(三、五) 五		(一〇〇〇) 五一
非農家			(五〇〇) 一			(五〇〇) 一		(一〇〇〇) 二

第八表 清野村男女別郡別出村人数

郡	清野村		中郡市		大郡市		外郡		地域不明		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
総数	40	40	7	7	14	14	1	1	1	1	96
5歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
5歳以上	39	39	7	7	14	14	1	1	1	1	94
10歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
10歳以上	38	38	7	7	14	14	1	1	1	1	92
15歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
15歳以上	37	37	7	7	14	14	1	1	1	1	90
20歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
20歳以上	36	36	7	7	14	14	1	1	1	1	88
25歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
25歳以上	35	35	7	7	14	14	1	1	1	1	86
30歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
30歳以上	34	34	7	7	14	14	1	1	1	1	84
35歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
35歳以上	33	33	7	7	14	14	1	1	1	1	82
40歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
40歳以上	32	32	7	7	14	14	1	1	1	1	80
45歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
45歳以上	31	31	7	7	14	14	1	1	1	1	78
50歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
50歳以上	30	30	7	7	14	14	1	1	1	1	76
55歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
55歳以上	29	29	7	7	14	14	1	1	1	1	74
60歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
60歳以上	28	28	7	7	14	14	1	1	1	1	72
65歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
65歳以上	27	27	7	7	14	14	1	1	1	1	70
70歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
70歳以上	26	26	7	7	14	14	1	1	1	1	68
75歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
75歳以上	25	25	7	7	14	14	1	1	1	1	66
80歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
80歳以上	24	24	7	7	14	14	1	1	1	1	64
85歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
85歳以上	23	23	7	7	14	14	1	1	1	1	62
90歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
90歳以上	22	22	7	7	14	14	1	1	1	1	60
95歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
95歳以上	21	21	7	7	14	14	1	1	1	1	58
100歳未満	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
100歳以上	20	20	7	7	14	14	1	1	1	1	56

(21)

以上を適量して、上記ニヶ村における移動の地域的性格はその間接平均の標準値と認められるが大勝  
 初市場から遠かく地に居住する村として共通の性格を呈示している、以下これを要約しなから小文のし  
 めく、リトしよう、

一 斎村の地域として既述外が第一位を認め、男女別には男子の比率が高く、年齢別には、上層に比率  
 が高いが下層にも又みられる。

女子は隣郡への移動の比重が戦前を限り増し、戦時中には中山郡は比重が高い。男子の隣郡への移動は戦前より低く、戦時中は主として中層にみられる。

したがって、男子は比較的遠距離を移動し、女子は主として近距離を移動するといわれる。一般的傾向として、にもみられるといつてもよい。県外を一掃して遠距離とみることは勿論問題であるが、ともかく県内への移動より県外移動の比率が漸いことは、移動過渡期において、距離の制約を越えて遠く遠

備資金を求め、準備に迫られていることを物語るといつても過言ではあるまい。

かつ、従来余り遠距離をゆかぬとされてきた下層層において、県外移動の比率の比較的高いことは、戦後移動困難時にみられる一特色であり、移動の遠距離を物語るといえる。

右図又大都市への移動が二推位を占め、重要であること、も関連するが、こゝへの移動は男女ともみられるが比率は男子に高く上下階層ともに比率が漸いこと、も取柄している。

中小都市への移動は成人と問題にあらぬ程小童で、階層別には中下層にみられるが、これは戦前、とくに大府の市街から遠く、地に落ちる村よりの移動として比較的比重の大きであつたのと対照的である。当時における豊後工業の地方分散後の海城層と関連することであろう。

これに及び村への移動は最大の比重を占めるのであるが比率としては中上層に高い傾向がみられる。この東戦前移動促進期に村への移動の比重は非常に低かつたこと、まさに逆傾向を占めるものである。

農村人口の農村離れと、その背景の形態を物語る。

かく大層にいふは、戦後移動の特色としては、下層層が距離的制約を出来るだけ越えて遠く地方へ移動せんとする遠征的傾向と、若年の遠征性を交へて上層層が距離制約を越える傾向と、中層層

層は余り遠くをゆかずとして村へ移動せんとする傾向がみられるといえる。

前三者は相互に、性格を異にしているといえ、つれは農業化の傾向を占めるものであり、後者は

一応の調査適性を示すものともいえるであろう。

以上の調査は、今後に予定される他村の調査結果の判明にともなつて補正修正されるであらうし、又入湯村有の地域的性格の検討と相ともなつて、移動交流現象の二側面としての意義をもつものである。